

# 天文教育

# 5

2024

*Publications of the Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy  
(PJSEPA)*



<特集> 中部支部会

<投稿> Stellarium 活用のススメ (3) / スマート望遠鏡 Seestar  
の活用 (1) / 児童が自分で星や星座を探すプラネタリウムの授  
業実践 / 天の川再現 Box の作成

<報告> 天文教育論文アーカイブ / 天文教育フォーラム開催報告  
/ 2023 年度若手奨励賞報告

一般社団法人 日本天文教育普及研究会

## 本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

なお原稿の投稿は、編集部から依頼した場合を除き、原則として当会会員の方に限らせていただきます（共同執筆者に会員を含む場合はこの限りではありませんが、投稿は会員の方からお願いいたします）。

1. **原著論文**：天文学教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主な内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクト（要旨）には英文も付けてください（英文は審査通過後に追加も可）。
2. **解説記事**：天文学や天文学教育・普及に関する解説・紹介記事や、さまざまな天文学教育や社会教育などの実践記事。分量は刷り上がりで6～10ページ程度。
3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告など。分量は刷り上がりで2～4ページ程度。
4. **書評**：天文学や天文学教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで1～2ページ程度。
5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで1ページ程度。
6. **裏表紙の写真**：タイトルと400字以内のコメントとともにご投稿ください（写真のみでも構いません）
7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただく場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。

- ・ **締め切り**：1は随時受け付け、2～7は偶数月（発行の前月）15日です。投稿先は [post@tenkyo.net](mailto:post@tenkyo.net) です。
- ・ 本誌に掲載された記事（上記1～6および7の一部）は、当会 Web サイトにて pdf ファイルの形で一般に公開いたします。インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡ください。
- ・ **広告掲載**を希望される方は事務局 ([jimu@tenkyo.net](mailto:jimu@tenkyo.net)) までお申込みください。掲載料は B5 判 1 ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4 ページ ¥7,000-、チラシの折り込み ¥20,000-です。

### 【編集委員会からのお願い】

『天文学教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願いいたします。

- ・ 原稿の投稿は、原則として Microsoft Word ファイルでお願いします。
- ・ 執筆用のテンプレートが当会 Web サイト (<https://tenkyo.net/>) からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださるようお願いいたします。執筆上の留意点なども記しています。
- ・ 十分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
- ・ 提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
- ・ Word 以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
- ・ 原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願いいたします。

投稿先・質問先 メールアドレス：[post@tenkyo.net](mailto:post@tenkyo.net)

## 表紙の言葉

### さようなら、春の彗星に思う

ポン・ブルックス彗星と五竜岳に沈む月齢1.7の月  
2024年4月10日 19h35m, Canon EOS R5, TAKAHASHI  
FSQ106 (f=320mm, F=3.0), ISO10000, 露出5sec,  
撮影地：長野県小川村番所, 撮影者：大西浩次

ポン・ブルックス彗星 (12P/Pons-Brooks) は、公転周期が約70年の彗星です。軌道傾斜角が約74°と急で黄道面を北から南へ通過するので、日本からの見頃は、近日点通過 (2024年4月20日) 前の4月上旬まででした。周期が70.06年と、地球の公転周期の整数倍に極めて近いため、ポン (Jean-Louis Pons) が発見した1812年も、ブルックス (William Robert Brooks) が再発見した1883年も、そして、前回 (1954年) の回帰時も、太陽との位置関係が悪く、大きな核の彗星にも関わらず、大彗星としての姿を見ることが出来ませんでした。ところで、この約70年という長さは、一生に一度の天文現象になるでしょう。天文現象は、毎回「一期一会」ですが、この彗星のように人

の寿命に近い現象には、不思議な運命？を感じます。例えば、公転周期が75.32年のハレー彗星 (1P/Hally) などは、歴史的だけでなく、個人的にも特別な意味を持っている方も多いでしょう。前回の回帰 (1986年) 時は、観測条件が非常に悪く、大彗星の姿を見ることが出来ませんでした。50代以上の皆さんには、それぞれの思い出があるでしょう。一方、前々回の1910年の時は、彗星の尾の中に地球が通過するというで大騒ぎになっただけでなく、その大彗星の姿を見た人々の中から、その後活躍する天文学者や天文アマチュア家たちがたくさん生まれ、いまの日本における「天文文化」のスタートになったと考えています。そして、次回の2061年は (公転周期の端数0.32年の違いで) 好条件での大接近になります。きっと、再び、天文学や宇宙への関心を高める起爆剤になるでしょうが、その様子を見る事ができないことは残念です。でも若い天文教育の世代に任せたいと思います。そう言えば、再帰新星として最も明るくなる T CrB (かんむり座 T 星) が、もうすぐ新星爆発を起こします。こちらは約80年に1度の現象、これは、しっかりと我が目に留めたいと思います。